

二〇一〇年五月二八日(参加者一四名)

若葉風通ふ堂縁去りがたく わかば
 杜若 由緒 札立つ心字池 " "
 老鶯や 寺苑の森の奥深し " "
 青銅の 伽藍包みて夏木立 " "
 鐘楼に 新樹の影の揺れやまず " "
 牡丹の 火照りをさます日照雨かな うつぎ
 正直に 生きて息災 菖蒲風呂 " "
 シャンソンをうたおうかしらリラの雨 " "
 軍港の 湾真っ平夏燕 " "
 早苗田の 風の漣絶ゆるなし こすもす
 と見る間に 舟虫岩に隠れけり " "
 よく廻る ペットボトルの風車 " "
 山藤の てっぺんよりの肩こぼる 小袖
 船頭の 片方寡黙風薫る " "
 石垣を 映し代田の静まれり " "
 廃校の 門に散り敷く桜蕊 菜々
 楠若葉 朝臣の墓の天蓋に " "
 玉砂利の ひとつひとつに若葉影 " "

めざす 寺意外に遠し道薄暑 つくし
 遠足の子に一喝の笛が鳴る " "
 新緑に閉じ込められし山の寺 有香
 竹の秋 獣害かこつ老農夫 " "
 聞えくる 婚の賛美歌窓若葉 宏虎
 明日香路や眼を洗ふごと柿若葉 明日香
 天つ藤 ゆらぎて過ぐる山の風 よし子
 ひと色の 緑であらず夏迎ふ 綴
 四囲の 森映す川面の緑濃し 満天
 ひらひらと 峡の日返す柿若葉 "

定例句会みの選

二〇一〇年五月二八日(参加者一四名)